

痔核の治療 vol. 2

大腸肛門外科部長

岡本 欣也



Q4 痔核の症状は？

痔核は生活中で徐々に大きくなつて症状ができる慢性のものと、突然 朝起きたら腫れていますのような急性のものとがあります。通常、痔核は時間経過の中で慢性的に大きくなつて症状ができるものが多く、その際は肛門から脱出したり、排便時に出血したりします。痛みは少ないのが特徴です。出血はさくっと切れて出るというよりブドウを潰した時に汁ができるようなイメージです。そのため小さい痔核は紙につく程度ですが、大きい痔核は便器に飛び散るような出血をします。脱出の程度を図4のように分けていますが、この脱出の程度が治療の判断に重要となります。次号以降でお話ししますが、3度以上は手術の適応です。一方、突然できた急性期の痔核は内部で内出血し血豆をつくり、腫れてものすごく痛いです。表面の皮膚が破れると出血もします。

図4 痢核の脱出度分類

- | | |
|----|------------------------------|
| 1度 | 排便時に肛門管内で痔核は膨隆するが、脱出はない |
| 2度 | 排便時に肛門外に脱出するが、排便が終わると自然に還納する |
| 3度 | 排便時に脱出し、用手的な還納が必要である |
| 4度 | 常に肛門外に脱出し、還納が不可能である |

Q5 診察ってどんなふうにするの？

肛門科って普通かかりたくないですよね。何されるかわからないし、そもそも人に見られたくないし。ここで外来を受診された際の診察についてお話しします。受診する前に知っておくと少しは安心するのではないかでしょうか。肛門科を含めすべての科が紹介状の持参をすすめています。肛門科では初めて診察される際、紹介状があればあらかじめ電話で診察予約ができるようになりました。多くの患者さんに受診していただけるのはありがたいことですが、待ち時間が長いとお叱りをうけることが多かったのも事実で、この予約制度で待ち時間が短くなり患者さんの満足度が少しでも上がることを期待しています。

肛門科の受付にくると、まず問診票の記載をしていただきます。肛門の病気の主な症状である脱出、出血、痛みなどが中心になります。肛門の病気は症状から推測できるものが多く、問診票をみてお話しを聞くだけでおおよその診断をつけることが可能です。私たちはお尻を見る前にだいたいの診断をつけています。診察室は個室になっていて看護師か看護助手に診察の介助をしてもらっています。気になる診察の体位ですが、図5のようになります。

図5 診察の体位

男性



女性



私は男女とも横を向いた体位にしています。自分が診察されるとき、図5の男性の体位は恥ずかしく、したくないからです。臀部をタオルで覆い診察開始です。診察は肛門を見て（視診）肛門内を指で診察（指診）します。その後肛門鏡（写真1）で肛門内を観察しますが、推定した病気を確認するために必要最小限の時間ですませ、お尻をだしている時間をできるだけ少なくしています。

写真 1



次号へ続く…